

哲学文化塾機関誌

フィロカルチャー

もっと源流へ、
もっと本質へ！

La Philoculture

夏

Summer

2021

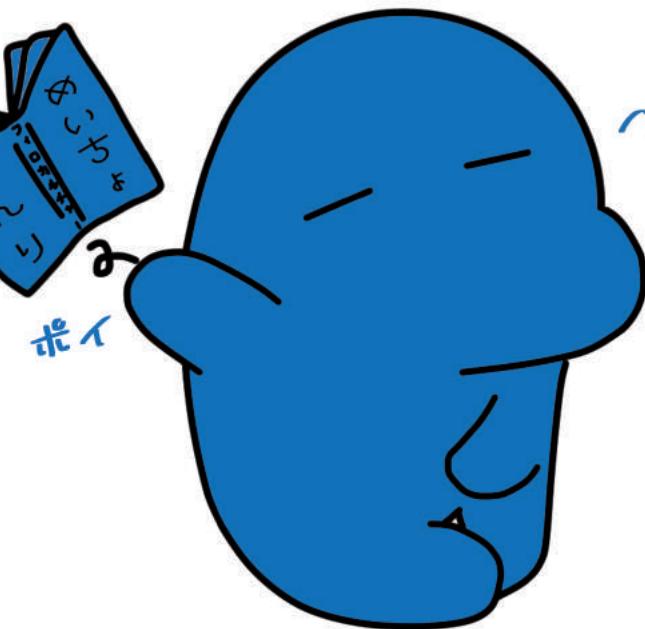
- わたしはあの日、市村みさ希
- 提言！人類存亡の危機に ヤナギダ・カツミ

小特集

真理は隠れてる？
アレー・ティア

今道哲学「まこと」の真理観
伊藤博章
美は輝きだ センセイと音楽 みむらりえ

へつ



なっちゃんの世界は多重に出来ている 夏目愛佳

鳥の幼鳥期と私の幼少期 比べてみたら バットフィッシャー・アキコ

※新・世界の名著 ハクスリー『知覚の扉』
※しののジヤズ宵醉話①『ブラックコーヒー』

Contents

小特集

真理は隠れてる？

フイロカル編集隊長・濱賢

アーティア

古今東西、一般的に、都合よく自分本位で語られことが多い「真理」あるいは「真実」について、皆さんと一緒に整理して、考えようと思います。永遠で絶対的な価値を有するもの、遠く存在のはるかかなで輝いているもの、深遠な形而上学的思索でのみ捉えうる絶対的価値、悟らなければ、決して到達できない境地、多大なお布施や高額なグッズを買わなければ得られない至福。こういったすべてのインチキないわれをとりあえず捨て去り、はじめて検証してみましょう。基本的なことを確認しておください、カルト商法や信者ビジネス、詐欺商材、妙なセミナーやマルチなどに引っ掛からずに済むという幸運が舞い込むかもしれません。

真理入門

ウイキペディアによると「真理（希：αλήθεα、

羅：veritas、英：truth、仏：vérité、独：Wahrheit）は、

確実な根拠によつて本当であると認められたこと。ありのまま誤りなく認識されたことがあります。

「真実とも」とあります。

しかしそもそも確実な根拠とか誤らずに認めるとか、誰にできるのでしょうか、仮にできて

いると言いつても、その保障はあるの？ と聞きたくなります。まして真理を真実と言い換

えられてもなあ……、ならば、逆に真実とは真

理であるとでもいうのでしょうか。それはともかく、人前でかつこつけて、いざ

哲學史など語るというときのために、読み方を

確認しておきましょう。ギリシャ語「アレーテ

イア」、ラテン語「ウ・エ・リタース」（以上、黒丸に

アクセント）、英語は略、フランス語「ヴエリテ」、

ドイツ語「ヴァールハイト」。要注意は、ラテ

ン語で、決して「ヴエリタス／ヴエリタース」

などと読んではいけません。いわんや論文など

でそのように表記するのも控えたいもの（ハッ

タリと感性的鈍さがバレます）。最初は正しく發

音して、次からは楽しんでいいと思いますが（例

えば、毎度毎度「トゥーキューディース」という

のはタイヘンなので、二度目からは「トゥキュディ

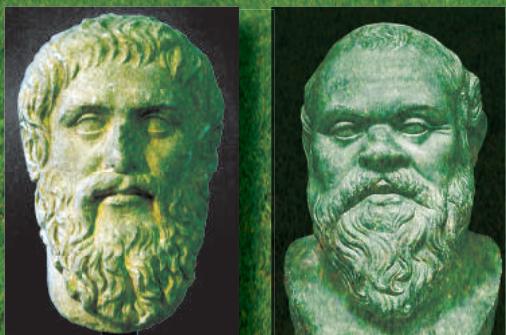
デス／ツキジデス」で、という意味。ソーカラテー

スも同様。分かつて樂するのは問題ないでしょう）。

ちょっと、横文字ばかりだけど、真理は漢字

ぢゃん！ という正しいツッコミは後に回して、

先に結論を言つておくと、古代から近現代、今



3 プラトーン（前427-347）

ソクラテス（前470頃-399）

小特集 真理は隠れてる？ 3

「まこと」の真理観～今道哲学を語る～ 伊藤博章 7

なっちゃんの世界は多重に出来ている 夏目愛佳 8

提言！ 人類存亡の危機に ヤナギダ・カツミ 10

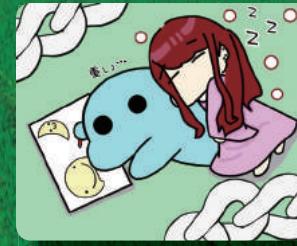
しののジャズ宵醉話①「ブラックコーヒー」 萩尾しの 15

わたしはあの日、 市村みさ希 16

鳥の幼鳥期と私の幼少期 比べてみたら バットフィッシャー・アキコ 18

美は輝きだ センセイと音楽 みむらりえ 20

新・世界の名著① オルダス・ハクスリー『知覚の扉』 22



カバー・レファレンス：こんばんにちは！ スナメリです。ボクの絵はTwitterが拠点で、4コマ漫画やイラストが掲載されているよ！ 内容は昔作者が体験したこと、周りのこと、感じしたことなどを元に描いたものなんだって。少しでも、今悩んでいる人に共感してもらえるように、今後もTwitterだけじゃなくてYouTubeにも活動の場を広げる予定だよ！ LINEスタンプも販売してるので、よろしくね！ ボクの絵はここで見られるよ！

☞ Twitter (sunameri@1234)

日に至り、思想家の数だけ勝手な真理あり、と
まではいかなくとも考え方方にパリエーションが
あり過ぎ、逐一付き合つてなどいられない（し、
そする義理もない）というのが実情かと思われ
ます。

しっかりと学びなさい、などという主張は、哲
学を利用して対価を得ている教師の論理でしか
なく、哲学を使っての収入獲得はソクラテス的
にはアウトです。それは学者ではなく、ソフ
ィステース（ソフィスト＝知者）と呼ばれる職
業講師の仕事であります。

さて、改めて五つの西洋語に目をやると、一
つだけ語的に毛色の違うやつが交ざつていま
す。ギリシャ語のアレーテイアです。

アレーテイアの不思議

語尾のイアは名詞化してるだけなので、無視
してア+レーテのアは否定、レーテ（元はランタ
ノーという動詞）は隠れる、忘れる事なので、
隠れず、忘れず、公然と一糸まとわぬあらわな
な姿でさらけ出しているような状況。つまり、
真理は常に全裸待機していると言えます。
しかし、大問題は、いや面白いところは、そ
れでも我々の目に見えるとは限らないという点
です。理由はシンプルで、人間はおるか者だか
らです。聰明なオイディップスでさえ、真理（＝
真実）が見えず、全てを見た（＝知った）ときには、
両目を潰し、何も見えなくなつたという何とも
され（やがて）る歴史的ソクラテス当人とは別物です。

脱線ついでに、ではなぜ、プラトン・キヤラ
のソクラテスが本当のソクラテスのように扱わ
れるのかを見ておきましょう。

答えは単純で、プラトンのソクラテスがと
もかくにも一番偉いからであり、それは何を隠
そうプラトン自身が西洋思想史上、とてもな
くドエライ影響を与えた大哲学者で、いわば神
様のようなスーパー大権威だからです。

神様といえば、キリスト教教義のハイパー厚
化粧式理論武装もプラトンなくしては語れませ
ん。その超絶偉大なプラトンの師匠であるから
には、ソクラテスは絶対にどこまでもスーパー・
グレートであつてほしい、いやあらねばならぬ、
あらねばみんなが困るのです。よつて当然、序
列階層、権威大好きな研究者たちはプラトン・
キヤラこそ真のソクラテス（に限りなく近い）と
ヨイショし続けてきたわけです。アリストパネ
ス・キヤラなど、月が落ちてきても、地球が割
れても到底認めるわけにはまいりません。

このように西洋でのプラトニズム（新プラト
ニズムも含め、大雑把に）やキリスト教神学・思想、
文化文明がすご過ぎるので、おまけに西洋かぶ
れの明治維新以降の我が国の先生方も、皆でソ

ついでに言えば、ファーブルの、見ることは
知ること（To see is to know）という名句ですが、
ラテン語のウイデオ（見る）とギリシャ語の（ヴ
）

オイダ（知る）が同語源であることから分かると
おり、大昔から、見ることは知ることなのです。
したがつて、隠れている真理というのはある
えません。言葉の成り立ちからして、モロ見え
状態ですから、隠された真理などというのはチ
ヤンチャラ（ヤンチャラ）おかしなことになります。なぜなら、
隠れた瞬間、アレーテイアでなくなるからです。

一体どれくらいのチヤンチャラさかと言えば
「募つてはいるが募集はしてない」くらいスープ
ー・チヤンチャラです。無意識のうちに募ると募
集という語感の硬度的差異でこまかそそうとしたのか
もしませんが、いずれにせよ、突出したスーパー・
チヤンチャラ・ポンに違いないのは明らかな真理）。

真理自体は大つぱらながら、ただただおろか
な我々には見えない、つまり分からない（＝知ら
れていないだけといことなのでしょう）。そして
世の中、分からぬことだらけなので、裏を返
せば、真理だらけということになり、これを解
明していくことが学問とか研究とか呼ばれる活
動です。

全裸待機以外の真理

残る四語ですが、残念ながら（＝）、そういう
た大つぱらな意味はありません。語義は、似た
り寄つたりで、原意も含め、正しいとか誠実と
か確たる物事とか、極めてまともです。

哲学的神学的真理の価値

といふことを踏まえれば、ソクラテスが、言
い方はソフトでも、お前らに見えていないア
レーテイアを余すところなく隅から隅までズズ
ズいとトコトン見せて（語つて）やつから、黙
つて大人しく聞くがよいと言つて弁明を始める
のもよく分かります（しかしこの時点で裁判の何
たるかを全く無視したアウト・ローなやつだという
ことも分かります。また、そこが面白いところでも
あります）。わざわざモロ見えのはずのアレ
ティアを語るのはそういうこと（お前ら情弱には
いる）ことである（Veritas est adaequatio intellectus
et rei）（出ました！トマス様のお言葉）を示し
ているような感じです。

哲学的神学的真理の価値

といふことを踏まえれば、ソクラテスが、言
い方はソフトでも、お前らに見えていないア
レーテイアを余すところなく隅から隅までズズ
ズいとトコトン見せて（語つて）やつから、黙
つて大人しく聞くがよいと言つて弁明を始める
のもよく分かります（しかしこの時点で裁判の何
たるかを全く無視したアウト・ローなやつだという
ことも分かります。また、そこが面白いところでも
あります）。わざわざモロ見えのはずのアレ
ティアを語るのはそういうこと（お前ら情弱には
いる）ことである（Veritas est adaequatio intellectus
et rei）（出ました！トマス様のお言葉）を示し
ているような感じです。

漢字の真理

さて、この辺で、後に回した漢字の真理につ
いて簡単に。西洋語同士でも違ひがあつたよう
に、漢字で真理（＝）と、いきなり霧囲気が変
わります。真理、真実、真如、とても抹香臭く
なり、確かにそつち系の語語です。

西洋思想を考え、議論する際に、こういった
漢字を使つていると、知らず知らずに、漢字の
魔力（仮の力）に引っ張られて、全裸待機とは
別世界の話になつてしまふので要注意です。西
洋思想の真理を考えているのに、漢字の魔力で
目がくらみ、真理と真実は違つとか、本当のこ
とはどうなのとか、誠実さは別物とか、なるほ
ど漢字ではそりやそうだけれど、西洋語ではど
れも訳語としてOKなわけ、何の話か分から
なくなります。外見にだまされてはいけません。

諦（アレーテイア）という語も真理直結です。あきらめる、明るくするということです。物事が分
かつた時点で、大宇宙の有界無限の真理を前に、
諦めざるをえない、というか、諦めに達するこ
とができた、つまり諦観や諦念という前向きな
境地。世界を見て、知つた、というわけです。

クレテスを担がざるをえないという構図です。
話を戻して、そんなこんなで、全裸待機して
るやつも正しいことも無数にあるので、つまり
真理は無限にあることになり、少なくとも希少
価値などないのでは、ということになります。
確かに、中にはささやかな、あるいはくだら
ない真理もあるらしく、ツアラストラもそ
う言つているのも事実です（もちろん偏見独断で突
つ走るニーチェらしく。次ページ欄外引用文参照）。

そこでも半ば強引に全真理に価値を付与する
ために、（＝）ところがどっこい、無数の真理には、
共通する真理のイデアのようものが入つてい
て（個々の物や音が美しいのは美的イデアを与えら
れているから皆美しいつてやつ＝イデア論）、究極
的唯一絶対の神様によつて分与されているので
す。だからとても価値があります。

いやいや、そもそも神様が美しいモノもそう
でないモノも万物全部創つたんちやうんかい？
とツッコめるほど、とほんど真理だらけ、詭
弁とも言われかねない屁理屈ですが、こういつ
た思索を支えているのもプラトニズムです（注
）

歴史として要チェックなあくまで昔の考え方です）。
信じる（ロゴス）／信じない（＝）で言えば、宗教（やこの手
法を悪用したセミナーなど）にありがちなレトリ
ックで「そこでイエスは自分に従つたユダヤ人
らに言つた。君たちが私の言葉に従いつけるな
ら、本当に私の弟子です。そして君たちは真理
を知り、アレーテイア）で君たちは自由になります」（ヨハ
ネ福音書8章31節～32節。下記欄外参照）のように、真理の実相

ただし、アレーティアのような全裸待機だけを見て、知ったとは限らず、漢字の世界では、隠れているものをこつそり覗き見して、知ることも含まれているのでしょうか。

漢字遊びで真の逆

真の逆は偽人の偽と書きます。ウソも方便、隠し事は墓の中まで持つていケ！ ではないですが、確かに、残酷で醜い真理を伝えるよりは、事と次第によりけりで、偽りが人のためになることもあります。しかし、これを逆手に取つて、歴史的事実を書き換えたり、演出と称して都合よく錯覚商法的報道を行つたり、まれに当事者がこれこそ本当の話だと自ら信じ込んでしまつてゐる病的なカルト現象さえ起ります。

悪い真理と同様に、よい偽り、役立つ偽りもたくさんあり、しかしどっちも決めかねる難しさや悪用の弊害も混在し、何とも世知辛い世の中を象徴する漢字現象ではないでしょうか。

用例の確認

抽象論や一般論、方法論やハウ・ツーだけでは、分かりやすくてウソ臭いので、最後に実例をチェックしましよう。プラトンの『弁明』で、全裸待機のアレーティアの全てを、見えていないお前らに私は語ろうとソクラテスは言います。ニュッサ（トルコのネブシェヒル）のグレーゴリオス（美的形而上学に不可欠）は真理と虚偽を定義します。同じ古代、同じ言葉のアレーテイ

アでも七〇〇年も経つと、いろいろあって（そこが面白いですが）、雰囲気も変わり（モノからコトへ）、かなり理屈っぽくなつてます。というか、アレーティアが、少々小難しくなり（着飾り始めた？）、完全にほかの四語と同じ意味に移行しています。そしてニーチェ、真理にもつまらぬものもある。文化人気取りの意識高い系学者がのたまうちっぽけな真理など何とも寒過ぎる、とは、なるほど正論ばかりの長話つてところか。以上の三大思想家をチョイスしたのは、哲学文化塾・今道友信記念文庫的視点（今道友信氏が好んで取り上げた作品で、ニーチェの講義や『弁明』の読書会もしばしば行われていた）によるものです。



ニーチェ (1844-1900)
ニュッサのグレーゴリオス (c.330-c.395)

οὐτοι μὲν οὖν, ὥσπερ ἐγὼ λέγω, οὐτε οὐδὲν ἀληθὲς εἰρήκασιν, οὐδὲς δέ μου ἀκούσεσθε πᾶσαν τὴν ἀληθειαν—
Plato's *Apology of Socrates*, 17B

さてさて彼ら（原告側）は、私が申しましたとおりで、ほとんど何も正しいことを話しておりません。しかし皆様方には私はアレーテイアが本当のことについて余すところなくお聞かせいたしましょう。

*次のアレーティアとはずいぶん雰囲気が違います。

Τοῦτο δὲ ἐστι, κατά γε τὸν ἐμὸν λόγον, ὁρισμὸς ἀληθείας, τὸ μὴ διαψευθῆναι τῆς τοῦ ὄντος κατανοήσεως. (Ψεύδος γάρ ἐστι φαντασία τις περὶ τὸ μὴ ὄν ἐγγινομένη τῇ διανοίᾳ, ὡς ὑφεστώτος τοῦ μὴ ὑπάρχοντος ἀλήθεια δὲ, ή τοῦ ὄντος ἀσφαλῆς κατανόησις.)

Gregorii Nysseni, 'De Vita Moysis', Migne, PG, vol.44, p.333, A

私の言葉では、真理の定義とは存在するものについての考察が間違っていないということである。（なぜなら、間違いとは、存在しないモノについての思いに生じるある種のファンタジーで、確かな存在ではないものを実体ありと見なすことだから。真理とはあくまで存在しているものを確実に考察することである。）

*とても科学的で論理的であるが、前後を読むと……。

Geben sie sich weise, so fröstelt mich ihrer kleinen Sprüche und Wahrheiten:

Friedrich Wilhelm Nietzsche, *Also sprach Zarathustra Ein Buch für Alle und Keinen, Zweiter Theil, Von den Gelehrten*
彼ら（学者ら）が賛い振りをすると、私は彼らの取るに足りない模範的言辞にも真理にも寒気を感じる。

*この真理の使い方には、ちょっとしたアイロニーも？

第6回 今道友信メモリアル

「まこと」の真理観 ～今道哲学を語る～

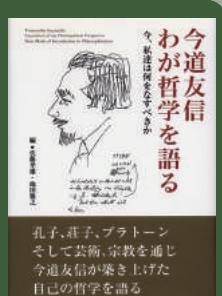
したがつて、「まこと」は、実現されることはなく、ただ近づくだけで、つねに志向される続ける。今道は「人間的実存は醒めているとき日常性の気づくことのない無と対面せざるをえない」と言う。「無」とは「破綻／傷」のことである。醒めた理性が「無に対面せざるえない」からこそ、理性は存在そのものへと超越を志向する。このような理性の超越志向の思想が、日本語の「まこと」に依拠する真理概念を導き出したと言えよう。

孔子、莊子、プラトーンそして芸術、宗教を通じ今道友信が染み上げた自己の哲学を語る
日本語の「まこと」に依拠する真理概念を導き出したと言えよう。

伊藤博章（いとう・ひろあき 哲學）

真理とは正確性を追求する客観的認識に関わるものとする真理觀とは別に、今道は、価値判断・決断・裁定など「判断」に関わる独自の真理觀を考えた。そのさい、この判断の真理は、和語の「まこと」に関係づけられて、真理概念が考えられていく。ただし、「まこと」といつても、幕末維新期の儒学の「誠」の思想とは全く関係ない。「まこと」は、「こと」に「完全・本物」の意味の接頭辞「ま」が付いた言葉であり、その語義が重要となる。つまり「こと」と「まこと」の関係に着目して、「まこと」という真理概念を提示するのである。

「こと」は「事象」と概念化される。「事象」を今道は「自己」を含めての現実事象として今意識せられている事象と分かりにくく表現をしているが、「人間が実存として関心を持つつ関わり合っている現実」という実存主義の哲学で言われる「状況」に近い概念であろう。この事象が不安定化し、それが自己に「不安」として



孔子、莊子、プラトーンそして芸術、宗教を通じ今道友信が染み上げた自己の哲学を語る
日本語の「まこと」に依拠する真理概念を導き出したと言えよう。

今道の哲学は理性の超越の可能性を考える哲学である。それゆえ、「超越者」が重要であり、それは「存在そのもの」「原同一性」などの概念として考察していく。「まこと」はこの「存在そのもの」とされ、超絶的なものと考えられ

在のもの」とされ、超絶的なものと考えられ

世界は多重に出来ている

アイス落としちゃつたクマチャン

わたしの友人にクマチャングッズの作家さん（あきのり氏・Twitter@akichan915）がいるのですが、先般、衝撃作「アイス落としちゃつたクマチャン」キーチェーンが発表されました（図①）。



図① アイス落としちゃつたクマチャンキーチェーン（あきのり氏提供）

わたしたちは心のフィルターを通して物事を見ています。

文化の違い

いわゆるLGBTなどに対する人々の見方は様々です。見方が異なるのは、これまでの文化・慣習・情報・体験によって人それぞれ、異なる心象風景に映っているからなのでしょう。その中には当事者を傷つけてしまうものもあるかもしれません。それをただ糾弾することは簡単ですが、それは各人の心象風景とは切り離せないことであり、これまでの文化・慣習などによる構造的なものである可能性があります。したがって、それを解決する1つの方法は、地道に文化・慣習を統一的にすりあわせることが挙げられるでしょう。その場合、特定の文化・慣習を失ってしまうという危険はほらんでいます。しかし、それでも新しい概念の方を重視して必要性を訴えるということもあるでしょう。

人と人は違う。自分と他人は違う。違うなら同じ統一的な基準を作つてそれに従うようにし、その差異が乗り越え可能であると信じる道。それも1つの道でしよう。しかし、もしそれが不可能である（経験的には既にそう思っている人も多いいると思います）となつたときの道も検討すべきではないでしようか。すなわち、相手の全てを納得するのではなく、その乗り越えられる方を可視化して理解、納得するという道です。

具体的には、あの人はこういうバックグラウンドがあるから、わたしのバックグラウンドから見える世界とc程度異なるはず。そのcがある範囲に収まっている(c~o)間はヨシとし、それ以上と見なされる場合(c~v)は攻撃や差別と見なして反論・抵抗する、という具合です（図②）。例えば、男性の格好をしたときのわたし（A）に対して、Bさんが「男らしくてカッコイイね」といってくれたとき、「男か女かはわからないのだから発言を慎め」というのではなく、Bさんの体系から見たわたしの表象 x_B はある程度（c）異なるのだと理解して、その程度の許容範囲を定める、という具合です。もちろん、cの大き

A

$$\deg\theta \leq \deg q + c$$

B

$$x_A \leq x_B + c$$

図2 A IUT理論の肝となる数式。もちろん、我々一般人が全てを理解することは出来ないけれど、参考文献(2)で一般向けの概略が学べます。

B 2人の考え方の中で対応する概念 x_A と x_B が“=”で結ばれているとすると、それらは等しくなく、 $x_A \leq x_B + C$ のような形の不等式で表現されるが、その程度をある一定以内におさめられれば、と思えます



◎夏目愛佳（なっちゃん）
自分の生きる道、性に悩み
2017年に「量子論的な男の娘」という考えに至る。その時から目の前が開け、同人誌的にサイエンス&個人哲学の本『あたらしい「わたし」の生き方』の執筆を開始。現在下記サービスにて販売中（<https://librasc/products/detail/305>）。

★参考文献・読書案内
 (1) クマチャン屋さんHP (<https://minne.com/@akichan915>)
 (2) 加藤文元「宇宙と宇宙をつなぐ数学—IUT理論の衝撃」、角川学芸出版 (2010) [九月]



もう1つの方法は、2つの文化が乗り越えられないモノと割り切つて、その差を評価（定量的に比べる、という意味で使われる用語です）・理解し、2つの文化間を自由に行き来する道を作ることです。

宇宙際タイヒミュラー理論

ある数学の体系の1まとまりを「宇宙」と表現します。異なる数学体系（宇宙）について、差を評価する研究が行われています。国と国との関係性を国際というのに倣つて、宇宙と宇宙の間のことは宇宙際といいます。京都大学の望月新一教授はその評価を行う式を考案し、宇宙際タイヒミュラー理論としてまとめあげました。その理論では宇宙間の変換において欠落してしまう情報を評価することができ、その点がこれまでの数学にはない新しい試みであるとして期待されています。

文 ヤナギダ・カツミ

人類存亡の危機に

未来の人間にとつて絶対に必要なことは宇宙旅行、つまり地球からの脱出です。なぜなら、50億年後には、太陽が燃え尽きてしまうからです。

体重、五グラムのヒト

しかしヒトは現在のサイズでは大き過ぎ、また重過ぎて、重力の変化に弱いのです。そこで、一例として一万分の一の大きさになれば、体重は五グラムほどになり、ジャンボジェット・サイズの機体に五〇〇万人が乗れます。ちなみに、人類によって地球環境が汚染されてしまったとか、エネルギーを使い果たしてしまったといつた理由で、地球から離れることはありません。それらは、必ずヒトの英知で解決

できるからです。

五グラムというと、アメ玉一個程度となり、脳の容積が問題になりそうですが、不足分はクラウド的なもので補うことになるでしょう。この条件で同じものを一〇〇〇機作れば、五〇億人が搭乗でき、地球脱出が、より現実的になります。ちなみにボーリング747だけでも、一九六九年から二〇一四年の間に一五〇〇機が納入されています。

五〇億年後はずいぶんと先のようと思われますが、その間にかなり大幅な進化をしなければ

なりません。ただし

自然な進化というより、人為的な品種改良のよう

なものに近いです。

というのも、一般的に進化は現状に合わせて行われてきており、まだ見ぬ未来のた

めの進化というのは、起きようがないからです。

品種改良で有名なのはイヌです。五〇〇以上



の多品種を誇るイヌという生き物は、大自然には存在せず、ヒトがオオカミから作り上げたもので、よく神様が怒らなかつたものだと、感心します。

つまりヒトはイヌにとつて神様(創造主)のよくなき存在であり、このことはイヌがヒトを大好きになる理由もあります。

ほかの恒星や銀河系の重力と同程度になる一〇万au(約一・五八光年)の間に球殻状に広がっているとされるまでしか行けませんが、数世代後にはもつと遠くに行けるでしょう。木星探査衛星ジュノーが時速二六万五千キロなので、速度が数倍になれば、何光年も距離が伸びます。

実際には一〇〇万年生きる微生物もあり、到達した新しい地球で最初から進化するのではないか、現地で解凍するデータファイルのように展開するべく、広い宇宙を旅します。

ヒトがヒトの形のまま宇宙へ行くのは、音楽をデータでダウンロードするのに対し、楽団を家に呼ぶようなことになります。

更なる特化スタイル

できることなら、私たちはハリウッド映画のようないくつかの宇宙へ旅立つのです。この姿は地球に特化し過ぎて、エネルギーの損失も多く、宇宙旅行向きではありません。

例一として更に宇宙旅行向きなスタイルがあります。それはヒトのDNAを持つ微生物です。宇宙線にも強く、寿命は一千年だとすると、光速の一万分の一の速度(時速一万千メートル)で飛べば、一世代で一光年の距離まで到達できます。

これではまだ「オールトの雲」(太陽系の外側を取り巻く理論上の天体群で、太陽から約一万auと太陽の重力が

感動と実用

また星の距離が縮まるチャンスもあります。

それが天の川銀河とアンドロメダ銀河の衝突です。衝突といつても星同士がぶつかる確率は低く、数光年の隣りに別の太陽系が引っ越してくるかも

しません。

そうした遠い未来の話をされても、どうせ見ることはできないのだからと、無関心になりましたが、たとえ見ることができたとしても、あまり



つまり「ワワワ」みんなで浮かぶのは気持ちよさそうですが、実生活ではそれほど重要ではないのです。一方Aーの発達で、ヒトは何もしなくてよくなってしまうのではないかと心配されています。

● 何もしないことが重要

ところが宇宙では何もせず、エネルギーを使わないことが重要です。宇宙旅行の間に、乗員同士のいさかいやケンカが起きるのは、夢のような出来事となるでしょう。

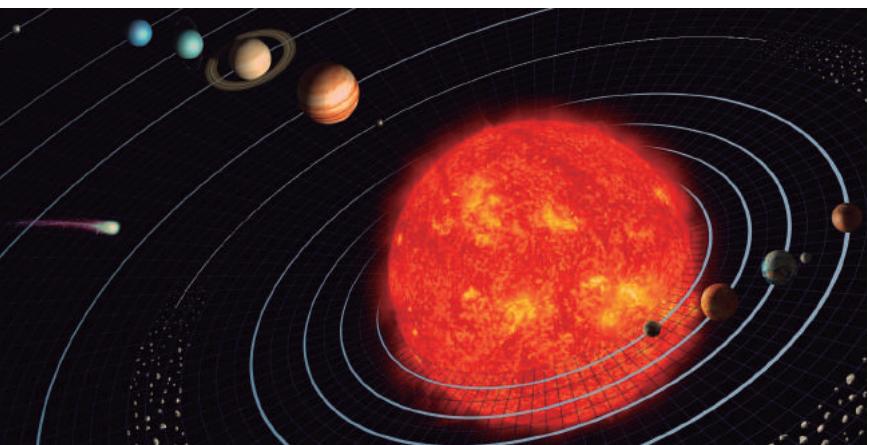
そして宇宙に飛び出すとき、もはや発射エネルギーすら使わないかもしれません。太陽は燃え尽きる前に巨大化して、その直径は太陽の中心から地球をはるかに超えます。

つまりみすみす巨大化する太陽に飲み込まれ、溶かされるくらいなら、すい星を誘導して地球に衝突させ、そのエネルギーで宇宙に飛び出すのです。

一見乱暴な計画ですが、ここは「地球に侵しく」などといつてはいる場合ではありません。これにより得られるエネルギーは、人間の作る全核兵器の総和の比ではなく、予想外のスピードが出来る可能性があります。

このような極めて強い衝撃に対しても、微小構造は有効です。そして到達した地球の環境に

合つよつ、ファイルが徐々に解凍されてゆくわけです。



イノベーションの源 美のエネルギー

そのとき私たちの姿は、どのように復活されているでしょうか。ところで話は前後しますが、私たちが未来に向けて形を変化させるとしたら、そのイノベーションの源は何でしょうか。

まず国家などによる強制的変化や宗教もしくは思想などによる変化は、結局のところ組織が絡み、長く続かないでの、ダメでしょう。

つまり自主的に、あるいは知らないうちに自らを品種改良することになり、そこで役立つのは意外にも、「美」のエネルギーであろうと考えます。

このとりとめのない美という概念は、生殖や娯楽をはじめとして、経済や政治でも、常にあらゆるところで驚くべき機能を發揮しています。

また歴史上あらゆる時代においても、その形を変えて、柔軟に、ヒトだけでなく様々な生物、

する予見として、生命体が小型化する可能性の中に、ペットの世界が挙げられます。

最初は手のひらサイズのイヌやネコから始まり、ウマやライオン、ゾウやキリンとエスカレートし、とうとう禁断の人体実験が行われます。

といつても品種改良ですから、意外と倫理観

すなわち水素からヘリウム、更には超新星爆発の核融合により様々な元素を作り続けている宇宙の実験室では、同じく生命の実験もまだだ終われないはずで、それは「死を悲しむ心」という理由なき存続願望の存在が証明していましょう。

また私たちが地球に優しくしようとも頑張っているのに、地球（宇宙）は残酷で、何度も大量絶滅を繰り返します。

そこで生命体はそれに対抗すべく、極めて多くの種類に分化し、いかなる地球からの攻撃に対しても、その中のどれかが、必ず生き残れるようになっています。

その点人類は分化していませんが、助かる人間とそうでない人間は、地位や経済力で既に分化されているのでしょうか。

このように生命がたくましく生きる中、宇宙のバイブルでは暗黒物質まで確認され始め、今なお継られ続けています。よつてどのようなヒトでも勝手に神の名を用いて結論を出すことは、許されていません。

美のイデア

同じくしても、宇宙がもたらした生命といふシステムは、物質の生成システム同様、そう簡単に「いかで途切れてしまうことはないで

● 途切れない生命

「そもそも宇宙では何もせず、エネルギーを使わないことが重要です。宇宙旅行の間に、乗員同士のいさかいやケンカが起きるのは、夢のような出来事となるでしょう。

その中で「ウザイー」と言わながらもしつけたいこと。美とは？ それに関連

わたしはあの日、

市村みさ希

わたしはあの日、
青空に向けて一匹の子羊を放ちました

わたしはあの日、
幽霊のように漂い続ける風と対話をし
わたしは一体誰なのかと問答をしました

わたしはあの日、
放された子羊がかつて駆けていた麦畑に立ち
地平線に向けて歩き出しました

わたしはあの日、
ぼやけていく問答が蘇る街を見下ろし
曖昧な孤独に取り憑かれました

わたしはあの日、
地平線を跨いで地に降り立つた
虹の根源を探しはじめました

わたしはあの日、
己は無力であるがまま
息を潜めて孤独な犠牲者を

わたしはあの日、
辿り着いた虹の地点が
暗闇に映されたオリオン座の点と点を結び
愛という無機質な幽霊に触れました

わたしはあの日、
潔白と称した無知を学ばされ
正しい誤解を身に付けました

わたしはあの日、
暗闇に飲まれていくさまを見届けました
息を潜めて孤独な犠牲者を

わたしはあの日、
傍観しておりました

わたしはあの日、
争いに疲れ肉体の安息を選びました

わたしはあの日、
身に付けた誤解を解くべく
凡ゆる表情の輪郭を嗅ぎ追いました

わたしはあの日、
争いに疲れ肉体の安息を選びました

わたしはあの日、
彷徨い続ける空虚の祭囃子に
憂えておりました

わたしはあの日、
肉体の安息を選び
膨大な歴史を魂に宿させました

わたしはあの日、
身に付けた誤解を解くべく
凡ゆる表情の輪郭を嗅ぎ追いました

わたしはあの日、
膨大な歴史の足跡を廻り
地を這い進むことにしました

わたしはあの日、
彷徨い憂う視線の先で
青い硝子を見つけました

わたしはあの日、
振り返った地に残された
不自然な足跡を確認し
不在を誓いました

わたしはあの日、
手にした青い硝子から
一艘の小舟を作りました

わたしはあの日、
小舟の先頭に立ち
お月さまに向かって漕ぎ進めました

わたしはあの日、
かつて放った子羊と共に
月夜の海を漂いました

わたしはあの日、
かつて駆け抜けた麦畑に
かつてくぐり抜けた虹の根源に
不在者の声と
歴史の残像を背負い
わたしはその日、
子羊を連れて
地平線に向けて
手放した無に向けて
再び歩き出しました

わたしはあの日、
かつて放った子羊を見つけました

わたしはあの日、
円環の祈りを紡ぎ
その輪の影を失いました

わたしはあの日、
あざやかに眠りの中で
かつて放った子羊を見つけました

わたしはあの日、
失った影を引き連れて
人工物の間を彷徨いました

わたしはあの日、
掲げた白旗を再びやさしく身に纏い
共に眠りにつきました



市村みさ希

演劇企画ニガヨ
モギ主宰、企画、
脚本執筆、演出、
広告デザインを
担当。

ニガヨモギの花

言葉である「不在」をテーマに、
詩的で独創的な世界観、絵画的構
図を意識した幻想的な空間作りを
目指した創作活動を行う。近年は
映像制作にも携わる。

「わたしはあの日」YouTube にて
映像版無料公開中。

わたしはあの日、
凡ゆる表情の輪郭と対面した代償に
人間が生み出す病によって
有限の枠組みを観察しました

わたしはあの日、
人間が生み出す病によって
有限の枠組みの中で人生を数え始めました

わたしはあの日、
凡ゆる表情の輪郭と対面した代償に
人間を追われました

わたしはあの日、
凡ゆる表情の輪郭と対面した代償に
人間が生み出す病によって
有限の枠組みを観察しました

わたしはあの日、
凡ゆる表情の輪郭と対面した代償に
人間を追われました

鳥の幼鳥期と私の幼少期 比べてみたら

文・写真 バットフイッシュヤー・アキコ

ガラパゴス諸島には多くのマングローブ林がある。海辺はもちろんのこと、島のメインストリート脇にも見られる街路樹のような存在だ。そしてそこには多くの鳥の姿が見られる。この島で生活していると、それぞの鳥にテリトリリーがあることに自然と気づき、「このマングローブのこの位置にいるということは、いつものあの個体だな」となんとなく個体まで識別できるようになった。中でも私が印象に残ったのが、シラガゴイというサギの一種だ。

白昼のマングローブ林で眠そうにしている鳥

元々ガラパゴスバットフィッシュに会いたいという理由だけでガラパゴス諸島を目指した私は、ガラパゴスの他の生き物に関する知識はさほど豊かではなかった。初めての渡航時、昼間に島を散歩しながらふと近くのマングローブ林に目を向けた際、たまたまそこで背中を丸めて半日でたたずんでいたこの鳥に思わず「……誰?」と呟いてしまった。当時の私の予備知識の範囲内にこの鳥はいなかったのである。しかし初対面ながら、こちらが近付いてもノーリアクションでたただ眠そうにしているのが何だか面白くて写真を撮った。そしてその晩図鑑で調べてやっとこの鳥の名を知り、以来、意識的にシラガゴイを探して観察するようになつた。シラガゴイは体長約六一センチとカラスよりやや大きいサイズの夜行性の鳥である。どうり



で初めて遭遇したときは眠そうにしていたわけだ。しかし、夜行性だからといって日中ひたすらずっと眠っているわけではない。マングローブのお気に入りポジションで休息している時間もあれば、トコトコ道を歩いていたり、波打ち際で小魚を狙つていたり、日光浴や羽繕いをしていたりもある。

私がよく観察していた二羽の兄弟は、空になつた巣の残るマングローブの周辺を主な行動範囲にしていた。時々その巣の隣に二羽で並んでいる様子を見かけたので、おそらくこの巣で生まれ育ったのだろう。巣立ち後も慣れ親しんだ実家近くで過ごす様子に親近感を覚える。ある日の午後、兄弟が下を見ながらゆつくりと一小歩足を進めていたので、餌を探し歩いているのかと思いつきや、やれ木の皮だ石ころだと何かとくちばしで拾い上げてはお互に「見て見て」と言うかのようには報告し合つていた。それから子どもの頃の自分と彼らを心の中で比較するようになつた。共通点を見つけることが面白くなつたのである。

また別の日、この兄弟はこちらに向けて羽を広げていた。私に向いているのかと勘違いしそうになつたが、彼らが羽を広げている先は太陽。つまり日光浴である。私がそれまで見てきた野

幼鳥観察が面白い

群れずに単独で生きるシラガゴイだが、巣立つてから成鳥になるまでの幼鳥期は兄弟で行動を共にする姿がよく見られる。

私がよく観察していた二羽の兄弟は、空に

鳥の日光浴スタイルは腹這いに寝転んでまつすぐ羽を伸ばし広げるといふものが主流だったが、彼らは太陽に向かって直立て三角形に羽を広げる珍しいスタイル(幼鳥・成長間わず他のシラガゴイたちも同様だったので、この鳥の定番スタイルらしい)。

数分間このポーズで静止していたが、温まつたのか体勢を変えようと動き始めた。表側が完了したら、次は裏側である。

きっとこのポーズのままでくるりと後ろを向いて背中を太陽に向けるのだろうと思つて眺めていたら、次の瞬間に私の予想は裏切られた。

まさかの謝罪ポーズだった。体勢自体はほとんど変えずに、過度にお辞儀するかのよう体を前方に傾けることで太陽に自分の背面を晒したものである。この発想はなかつた。私が幼少期の頃ならどうしただろう? と考えたが、そもそも日光浴という習慣がなかつたことを思い出した。残念だ。

シラガゴイと自分の決定的な違い

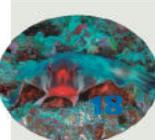
数日後、いつもいる場所に彼らの姿がなかつた。お出かけ中かと諦めて帰ろうとすると、バサバサと一羽だけ飛んできた。するとすぐ近くにある空いた巣、つまり彼の実家に歩いて入つていったのだ。普段ここで寝る様子はほとんどなかつたが、たまには懐かしいベッドで休みたくなつたのかもしれない。彼は巣の真ん中で立ち止まり、そのまま腰を据えるかと思うと突然巣の中をくちばしでつつき始めた。「何をする、実家の床に穴を開けるつもりか」とこちらが慌てると、ひょいと綿ばかりをくわえながら顔を上げ、巣の外へポイと捨てた。そして再び巣の中をつつき、「ゴミらしきものをくわえては捨てて返す」という意味合いに捉え直し、例えは幼少期から実家の掃除と修繕を自分から行うような人が「鳥頭」という称号を得られるようにしてみ

整える作業は繁殖期を迎えた鳥がとる行動だが、この個体はまだ幼鳥で繁殖能力はない。つまり、自分の子育てに向けてこの巣の再利用を企てる可能性はまずない。となると、ただの掃除と修繕なのだろうか。二〇分ほど彼を観察してみたが、この作業が終わる気配はなかつた。シラガゴイの幼鳥が人間でいう何歳に相当するのかは分からぬ。しかし少なくとも、私は幼少期といわれる時期に自分の寝床(しかも今はほとんど使っていない場所)を自分で熱心に掃除し繕い直すことはなかつた。

自分との共通点を見つけるつもりで行っていた観察だったが、結果的に自分の幼少期は頼りないものであったと認識することとなつた。記憶力が悪いことを「鳥頭」と呼ぶが、彼らの知能は私たちがそのように卑下できるものではない。全く失礼してしまつ。いつそこの言葉をボジテイブな意味合いに捉え直し、例えは幼少期から実家の掃除と修繕を自分から行うような人が「鳥頭」という称号を得られるようにしてみてはどうか。

◎バットフィッシュヤー・アキコ

ガラパゴスバットフィッシュ愛好家、NPO法人日本ガラパゴスの会スタッフ。チャーレズ・ダーリーイン研究所のボランティア・スタッフとして、一年半ガラパゴス諸島とエクアドル本土に居住した経験を持つ。日本人でおそらく最も多くのガラパゴスバットフィッシュを観察してきた者として、講演や寄稿、現地スペシャリストとしてガラパゴス諸島への同行等を行つてゐる。



—センセイと音楽—

今回で一つの終わりを迎える、と聞いている。一つの終わりということは、次の始まりが前提されているということなのであろうが、コロナ禍の中、一寸先は闇なので、先のことはわからない。

「今道センセイと音楽」というテーマで書くように言われたという私の記憶も正しいのかどうかわからない。わからないことばかりだけれど、まあ、いつか。

センセイの書物の中に『音楽のカロノロジー』という書物がある。これについてはどこかで触れてみたい気もするので、ここでは書名だけを紹介するだけにしておこう。

はショパンの音楽が一番好きなんです」と告白されたことがあった。そのとき、ショパンが好きだとどうして「女の子みたい」ということになるのだろうか、という疑問が浮かんだが、言わずに呑み込んだ。

センセイは少年の頃にチエロを習っていた、

センセイは音楽が好きだった。けれど、一般的な音楽愛好家とはちょっと違ったような気がする。名盤と呼ばれるようなレコードやCDが所狭しと棚を占拠する……ということはなかつた。

音楽を聴きながらつろぐという姿も見たことはない。

野球や相撲のテレビ中継を見ながら仕事をすることはあつたけれど、音楽を聴きながら仕事をするということもなかつた。

でも、センセイは音楽が好きだった。

晩年、チケットを購入して演奏会に足を運んだ、ということはなかつたけれど、若い頃はどうだつたのだろうか。外国に居て、シェ

ーラ・チエルカスキーのピアノの演奏会に行つて感動し、チエルカスキーの楽屋を訪れたか手紙を書いたか忘れたが、とにかくチエルカスキーに会つたという話は聞いたことがある。

作曲家のヤニス・クセナキス(だつたと思うが)と友達だつたとも聞いた。

原千恵子という伝説的ピアニストの評伝書の中に、センセイの名前が登場していたが、そのピアニストとどういう関係にあつたのか、聞いたけれど忘れてしまつた。

それはともかく、確かにセンセイは音楽が好きだつた。

「女の子みたいで恥ずかしいのだけれど、僕の本は本当だ。

センセイの歌曲に『カンガルーの子守歌』という話がある。チエロが空襲で焼けて以来、チエロを弾くことをやめた、というのは私の好意的な想像である。

ピアノは弾けたようだが、好きなショパンを弾いたという話は聞いたことがない。それでも、センセイは音楽が好きだった、というのは本当だ。



『音楽のカロノロジー——哲學的思索としての音楽美学』
四六版・368頁・上製・日美學園/ピナクルス出版、2013年。



『今道友信ピアノ小品集』のCD版。作曲、演奏とともに今道友信による。カセット・テープ版もあった。書籍で言えば、私家版に当たる作品集である。落語の自作自演(音声のみ)も残されている。

センセイにとって文芸は、享受するものである以上に、創造するものであつた。

音楽も同じだ。誰かが創った音楽を聴くこと以上に、自ら音楽を創り出すこと、作曲することが好きだったのだと思う。

私のこの考えはそれほど外れでないことは、センセイ自作自演のピアノ曲の音源が残っていることや、自作の歌曲が楽譜集になつていることが証明してくれるだろう。

社会派文化人やインフルエンサーのように、チラ見程度の印象と自己都合で、ほめ称えるのも古典に失礼な気がする。しかし、確かにそれらしく称えておけば、反論されることも少ない。一方で、時折、自分がまるで大詩人・大哲学者の身内（舎弟）や分身であるかのように舞い上がって、斜め上から熱く語る輩もいる（症状が進めば靈言か）。

ありがちのザックリなハツタリ概要で分かった気分になるのでもなく、はたまた、あたかも哲学談義に興じる大学生のような、分かる分からぬなどという、低い次元に距離を置き、実際に名著のインパクトある一節を体感してみようというのが本シリーズ・コラム趣旨である。

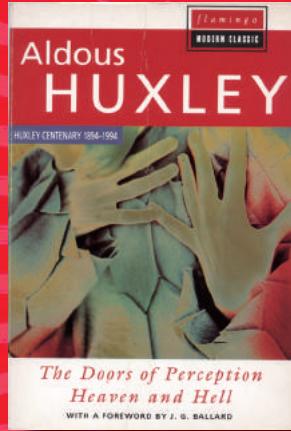
♦ オルダス・ハクスリー『知覚の歴史』

さて、コミュニケーション能力が問われて久しい今日この頃、皆様いかがお過ごしでしょうか？メスカリン（幻覚剤）体験手記というウリ文句（？）がクローズ・アップされがちなエツセイですが、テーマ、素材は何であれ、切れ味鋭いホンモノが筆を執れば、ありきたりな良識を突き破る爽快にして卓越した見識が光を放

We live together, we act on, and react to, one another; but always and in all circumstances we are by ourselves. The martyrs go hand in hand into the arena; they are crucified alone. Embraced, the lovers desperately try to fuse their insulated ecstasies into a single self-transcendence; in vain. By its very nature every embodied spirit is doomed to suffer and enjoy in solitude. Sensations, feelings, insights, fancies – all these are private and, except through symbols and at second hand, incommunicable. We can pool information about experiences, but never the experiences themselves. From family to nation, every human group is a society of island universes.

Most island universes are sufficiently like one another to permit of inferential understanding or even of mutual empathy or 'feeling into.' Thus, remembering our own bereavements and humiliations, we can condole with others in analogous circumstances, can put ourselves (always, of course, in a slightly Pickwickian sense) in their places. But in certain cases communication between universes is incomplete or even non-existent. The mind is its own place, and the places inhabited by the insane and the exceptionally gifted are so different from the places where ordinary men and women live, that there is little or no common ground of memory to serve as a basis for understanding or fellow feeling. Words are uttered, but fail to enlighten. The things and events to which the symbols refer belong to mutually exclusive realms of experience.

Aldous Huxley : *The Doors of Perception*



本質的な次元では、そもそもコミュニケーションなど成立はずがない！せいぜい間接的なものでしかない、というのが本名著の一節にある主張。今風に俗っぽく言えば、未だに、英会話さえできれば、異文化間で国際的コミュニケーションが成立すると勘違いしている明るくアクティブな啓発系諸氏の熱く残念な言動は論外としても、日常生活やビジネスや国際交流、文化交流、意味不明なIT関連などといった意識高い系、上級市民が好むサロン風コミュニケーション、○○クラブしかり、しょせん中途半端な幻想、思い込みでしか……ない。

このような論拠には、相當に根源的かつ、近現代的な認識論も潜んでいそうですが、本エッセイは、直感的で、そういう類のものではありません。なるほど、言つた／言わないで揉めるオワコン世間を見るに、むべなるかなも理。では、名著の一節をお楽しみください。

E. Note

具体的に作業プロセスを示さず、知らず、雑把に都合よく単純化し、抽象化を極め心地よく響く方法論や考え方をあたかも自分の歴史的考案、絶対的真理のように強い口調でそう快に言い切ってしまうインフルエンサーたちであるが、情弱や底辺の素人筋からの支持は絶大でも、現実的な研究や創作には、全くと言ってよいほど役立たない（情弱は情弱のままで、そう訴えれば、まだ信心が足りぬ、とまるでカルトと同じ信者商法）。理由は明白で、割り切れない例外的グレー・ゾーンが無限に混在するからだ。いや、ビジネスにおいてもかなり怪しいもので、AIだのロボットだのがヒトに取って代わると（今後始まる大変革であるかのように）叫んでる彼らも、ほとんどAIが何かも知らなければ、ロボットの運用管理もやったことのない外野席の空想家だ。狭い世界での偶発的成功体験が彼らの偽全能の源であろう。実際には、大工の棟梁のように、現場のどこかで急に欠員が出たとき、即座にその穴を埋める能力・技術・判断力がピンチを救う。実践できてこそ美しい。世の中を動かし導く志高き胡散臭いリーダーたちは、いざというとき、たいていはあたふたし、見事に他人を装う振りする真似を演じる。優柔不断にして、決断することはない。失敗の原因是当然自分以外のどこかにもっともらしく巧みに見いだされる。一方、うまくいっている偶然を自らの少しばかり優れた能力の賜物と、悦に入ってはまじめにそう信じ込む。このあたり2500年ほど前にトウキュディスがペリクレスに語らせたとおりだ。ということで、やっと古典に行き着いた。古典に学べと諂われ続けど、未だそして今後もあまり変わらぬ世を前提に、本号より新・世界の名著と題してモダンな古典的作品を紹介させていただこうと思う。ありふれた正論でもなく、常識的でもない鋭い卓見を実際に体感していただくために、一節集中で楽しもうという趣旨である。きっといつかどこかで心の役に立つ。翻訳は信用できないものも多いので、なるべく原文も紹介したい。（編集隊長・濱賢）

■フィロカルチャー 第6号（2021年夏）
■発行所 哲学文化塾（今道友記記念文庫）
■企画編集 ピナクル出版有限会社

■制作協力 大異山高徳院清淨泉寺
日美学園日本美容専門学校
ムネモニシューの会
■編集隊長 濱賢 (hamacken)
■e-mail : info@philoculture.jp
■url : http://philoculture.jp/



次号「フィロカルチャー」は2021年12月発行予定です

我々は共に生き、互いに作用し合い、そして反応し合う。しかし、いつの場合も、孤独である。殉教者らは手を取り合って闘技場へ赴く。だが彼らはただ独りで十字架に掛かる。抱き合い、激しく死にそうなほどに、恋人たちは自らの孤立した悦びの絶頂を唯一の自己超越へ落かし込もうと試みる。しかし、無益だ。自らの本性自体によって、各々具現化された精神には、孤独の中で苦しみそして楽しむことが宿命である。感覚、感情、見識、幻想、これらすべては個人的で、象徴を介してそして間接的でなければ、伝達できない。我々は経験に関する情報を蓄えうるが、しかし決して経験そのものを蓄えることはできない。家族から国家まで、人間の集団は各々が島宇宙という共同体である。

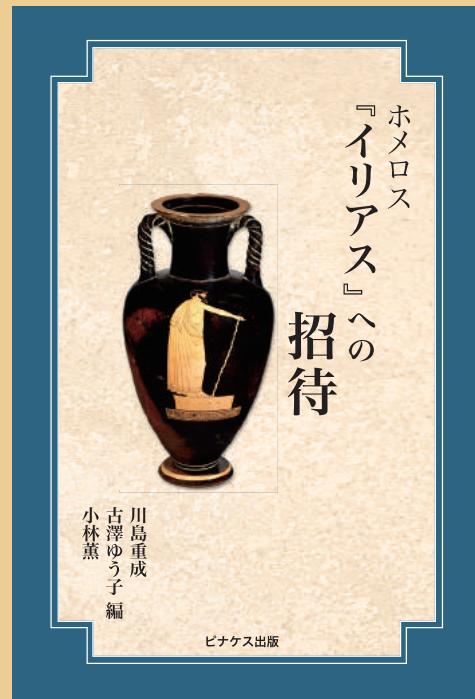
類推による理解あるいは互いに共感や感情移入さえ許されるほど、ほとんどの島宇宙は互いに十分似通っている。したがって、自分自身に関する死別や屈辱を思い起こせば、我々は似たような境遇に置かれた他人に哀悼の意を表すこともできるし、すなわち、自分自身を彼らの立場に置くこともできる（もちろん、いつも僅かばかりはピックウイック的な意味においてだが）。しかし場合によっては宇宙間での伝達は不完全いや存在すらしない。心とはそれ自体の場所である。それゆえ正気でない者や特異な才人が住む場所は凡庸な男女が生きている場所とはあまりにも異なっているので、理解や同胞感情のための基礎として働く記憶という共通基盤などほとんど、あるいは全く存在しない。言葉は発せられている、しかし言葉は知らせることができない。象徴が指示する物事は、経験という相互に排他的な領域に属している。

オルダス・ハクスリー『知覚の扉』

ホメロス『イリアス』への招待

川島重成・古澤ゆう子・小林薰 編

ピナケス出版



ヨーロッパ文化の源泉、最古の「文学」作品にして最大の金字塔である叙事詩『イリアス』は、古代・中世はもちろん、はるか2700年の時を隔て、今日もなお、様々な文化活動へ影響を与え続けている。

本書は、わが国では類を見ないスケールでギリシア精神のアルケートいえる『イリアス』の尽きぬ魅力を多様な視点から浮き彫りにする。専門家、研究者のみならず、ギリシア文化に寄せる一般読者の深い知的関心にも、十分に応えるものである。

ホメロス『イリアス』への招待 2019年発行
四六判・上製・592頁 定価：本体4,800円+税
ISBN978-4-903505-18-3 C1098

執筆者：川島重成／古澤ゆう子／小林薰／安村典子／佐野好則／古澤香乃／
山形直子／浜本裕美／河島思朗／石川榮治／池田黎太郎／平田松吾／
水島陽子／荒井直

